

# 【原著論文】 青年期女子における懐かしさ 感情尺度の因子構造の検討

宇佐美 桃子

金城学院大学大学院人間生活学研究科博士課程後期課程

## Examination of the Factor Structure of the Nostalgia Scale in Adolescent Girls and Women

Momoko Usami

Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

Nostalgia is a complex emotion that consists of multiple emotional components, which may include pleasant emotions and other emotions that reflect autobiographical memory (Iwata, 1997) . Based on the understanding that nostalgia is made up of complex emotions, this study created a scale to quantify nostalgia. A questionnaire survey was implemented with 133 female university students. Exploratory factor analysis indicated that a three-factor structure was appropriate. The first, second, and third factors were termed familiarity, bittersweetness, and painfulness, respectively. Sufficient reliability was confirmed for all factors. Additionally, a three-factor model was constructed, and confirmatory factor analysis identified significant values in all paths, indicating goodness of fit for the overall model (GFI = .909, AGFI = .861, CFI = .955, RMSEA = .069) . The present findings further suggest that nostalgia is a complex emotion. The use of the nostalgia scale, can enable objective examination of degrees of nostalgia to compare its qualities

Keywords : Nostalgia (懐かしさ),  
autobiographical memory (自伝的記憶),  
Kinjo Nostalgia Scale (KNS) (金城式懐かしさ感情尺度)

「懐かしい」とは、動詞「懐く」を形容詞化したものである。意味としては、「1. そばについていた。親しみがもてる。2. 心がひかれるさまである。しっくりとして優しい感じである。3. かわいい。いとしい。4. 思い出されてしたわしい。」と記載されている（新村，2018）。

懐かしさに関する研究では、快感情や自伝的記憶を反映している感情など、複数の感情要素からなる複合的な感情であることが示されている（寫田，1997）。今野・上杉（2003）は、懐かしさとはそれぞれの人の中に息づいている心的リアリティであり、正負の情動感情が融合したものであるとしている。

懐かしさと同義の意味を持つ言葉として「nostalgia（ノスタルジア）」が挙げられる。ノスタルジアは“a sentimental longing for one’s past”と定義されている（Sedikides, Wildschut, Arndt, & Routledge, 2008）。ノスタルジアに関する研究でも懐かしさと同様に、ノスタルジア経験は複合的な感情であり、ポジティブ感情は必須の要素であるが、ネガティブ要素も構成要素になっていると示されている（Barrett et al., 2010）。また、ノスタルジアには、小学校の卒業式の出来事といった自分自身の体験のように個人的な出来事の記憶に基づくものと、自分自身が体験していないにもかかわらず生じる懐かしさがある。前者は個人的ノスタルジア、後者は歴史的ノスタルジアと区別されている（楠見，2014；Stern, 1992）。

長峯（2017）はノスタルジアの邦訳として、「感傷を伴う懐かしさ」を提唱している。また、ノスタルジアの感情を向ける対象は、過ぎ去った過去の出来事や自分自身という記憶の中の対象が含まれているため、より複雑な感情となっている可能性があるとして唆されている（磯崎・杉山・佐藤，2011）。瀧川・仲（2011）や石井（2014）は、懐かしさをノスタルジアと同義で扱った研究を行なっている。よって、本研究では「懐かしさ」の英訳として“nostalgia”を用いることとし、広義の解釈を採用することで海外の研究も踏まえ、懐かしさを多面的に検討していく。

寫田（1997）は懐かしさを規定する感情要素として、「親しみ」「やさしさ」「せつなさ」「おかしさ」「新鮮さ」を挙げており、最も懐かしさを規定する感

情要素は、快感情を含んだ「親しみ」であると述べている。さらに、懐かしさに関する尺度を作成した研究もいくつかみられる。瀧川・仲（2008）は懐かしさの構成要素を明らかにし、懐かしさ尺度の作成を行なった。その結果、懐かしさ尺度を「ポジティブ感情因子」「ネガティブ感情因子」「哀愁感情因子」に分類した。哀愁感情については、現在では失われた「過去」への喪失感と、そのような過去を体験したという充実感とを反映する記憶に特有の感情だと示した。

石井（2014）は音楽に対する懐かしさ構成感情を検討している。その結果、辞書的定義を反映した快感情を含む「親しみ」、自伝的記憶を反映している「せつなさ」、時間的な空白感を反映している「おかしさ」の3因子が抽出された。「せつなさ」は単純なネガティブ感情ではなく、「ほろ苦さ」に関連するような認知的判断が混ざったネガティブ感情であると考察している。そして、せつなさは過去に接触した特定の対象に関係するような、個人にとって重要な意味を持つ自伝的記憶と結びついていることが推測されると示している。

池田・針塚（2015）は、今野・上杉（2003）の懐かしさ体験尺度を参考に、懐かしさを体験した際の情動について検討している。その結果、懐かしさ体験に伴う情動感情は「親和感」と「切なさ感」の2種類の情動から構成されていることを明らかにした。さらに、池田・針塚（2015）は、小池・渋谷・藤巻（2007）のリラックス感尺度と、松山（2003）の身体に関する言語を使った感情表現語の調査を参考に、懐かしさ体験に伴う身体感覚尺度においては、「リラックス感」と「高揚感」という2つの因子を導き出した。

これらの先行研究から、研究者によって懐かしさの定義は異なり、「懐かしさ」を構成する要素は複数あると考えられる。

ところで、懐かしさの効果を検討する研究もいくつか行われている。林・斎藤（2013）は、懐かしさは楽しさとリラックスをもたらすとした。懐かしさによって安らぎを感じ、温かくリラックスした状態になることで、様々な過去を受け入れやすくなると推察している。小林・岩永・生和（2002）は、懐か

しい音楽を聴取した際の感情反応と自伝的記憶の想起との関連を検討した。その結果、音楽がもたらす懐かしさを強く感じると、主観的には活動的なポジティブな感情が高まるが、生理的な覚醒が低下しリラックスすること、及び自伝的記憶を多く想起することが示唆された。

このように、懐かしさを喚起することで他の心理的特性に対するポジティブな効果が得られる可能性がある。先行研究からも、懐かしさは複合感情であると推察されるが、懐かしさの要素に着目して効果を検討した研究は少なく、その理由として本邦に主となる懐かしさ感情に関する尺度が作成されていないことが課題であると考えられる。そこで本研究では、懐かしさが複合的な感情から成り立っていることを踏まえ、金城式懐かしさ感情尺度 (Kinjo Nostalgia Scale；以下、KNSとする) を構成し、因子構造を確認すると共に、信頼性の検討をすることを目的とする。

## 方法

### 予備調査

KNSを構成する項目を収集することを目的とした。

**対象** 女子大学生と大学院生25名 (Mean = 22.6歳) が調査に参加した。

**手続き** 質問紙を配布し、懐かしさに伴う感情について回答を求めた。質問内容は、「あなたは、懐かしさを感じたときにどのような気持ちになりますか。また、「懐かしさ」といわれたときに思い浮かべる感情語にはどのようなものがありますか」という教示のもと、自由記述にて回答を求めた。なお、倫理的配慮としてA大学の「ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得た。

**結果** 予備調査の結果、86単語が得られた。「あたたかい」「穏やかな」「ほがらかな」などのポジティブな形容詞や、「悲しい」「辛い」「むなしい」といったネガティブな形容詞もみられた。予備調査を参考に、感情語ではない言葉を除き、2人以上の回答が得られた感情語である14単語を本調査で用いる項目として採用した (Table 1)。

Table 1. 予備調査の結果 (2人以上が回答した単語)

得られた単語	人数
<u>あたたかい</u>	15
嬉しい	13
切ない	11
楽しい	11
<u>悲しい</u> 、 <u>哀しい</u>	10
寂しい	10
古めかしい	5
優しい	5
<u>悔しい</u> 、 <u>後悔</u>	4
<u>苦しい</u>	4
<u>つらい</u>	4
戻れない	4
<u>明るい</u>	3
愛おしい	3
美しい	3
<u>おだやかな</u>	3
おもしろい	3
きれい	3
恋しい	3
薄い	2
幼い	2
<u>落ち着く</u>	2
キラキラ	2
しみじみとする	2
大切な	2
<u>ドキドキする</u>	2
<u>恥ずかしい</u>	2
<u>ほがらかな</u>	2
<u>微笑ましい</u>	2
<u>ほっとする</u>	2
<u>むなしい</u>	2

注) 先行研究に含まれる単語はゴシック体太字、採用した単語はゴシック体太字に二重下線、不採用の単語は明朝体で表記。

### 本調査

**対象** 女子大学生133名 (Mean = 19.7歳) が調査に協力した。

**尺度の構成** 石井 (2014) による懐かしさ構成感情尺度と、池田・針塚 (2015) による懐かしさ体験に伴う情動尺度を参考に18項目を選定した。さらに、予備調査で得られた14単語を加え、32項目からなる質問紙尺度を作成した。32項目の内容は、Table 2を参照されたい。

**手続き** 調査対象者自身が経験した懐かしさ体験を想起させるため、質問紙を配布し、「あなたが“懐かしい”と感じることはどのようなことですか。あなた自身が経験した懐かしい記憶にはどのようなものがありますか。」という教示のもと、自由記述にて懐かしさを記述させた。続いて、懐かしさに伴う感情について「全く感じない」から「強く感じる」の6件法により回答を求めた。

なお、倫理的配慮として予備調査と同様の倫理審査において承認を得たうえで、研究の導入時に調査の方法・個人情報保護の保護・参加の自由などを説明し、同意が得られた場合には署名を求めた。

### 結果

データに欠損があったものなどを除き、131名分の回答を分析対象とした。分析ソフトはSPSSを使用し、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した（Table 2）。固有値の減衰傾向（固有値は、8.28→5.24→2.01→1.52→1.49と減少した）および解釈の可能性から、3因子構造が妥当であると判断された。この3因子で回転前の全分散の48.5%が説明可能となる。因子負荷量.45以上の項目を採用し、いずれの因子にも低い値を示した項目は除外された。第一因子を『親しみ』因子、第二因子を『ほろ苦さ』因子、第三因子を『せつなさ』因子と命名した。

Table 2. 探索的因子分析の結果

	I	II	III
＜第1因子＞			
「親しみ」因子 $\alpha = .92$			
ほっとする	.82	.03	-.02
明るい	.80	.24	-.22
微笑ましい	.78	.11	.01
落ち着く	.76	-.09	.10
うれしい	.76	.38	-.19
あたたかい	.76	.05	.10
ほがらかな	.75	-.21	.01
こちょよい	.74	-.12	.02
たのしい	.71	.31	-.13
穏やかな	.63	-.23	.20
優しい	.59	-.09	.20
ほのほのとした	.58	-.22	.10
親しみのある	.49	-.20	-.04
＜第2因子＞			
「ほろ苦さ」因子 $\alpha = .83$			
つらい	.00	.87	.04
悔しい	.03	.83	.06
苦しい	-.10	.81	.10
恥ずかしい	.14	.60	-.06
＜第3因子＞			
「せつなさ」因子 $\alpha = .80$			
せつない	-.11	.28	.73
愛しい	.19	-.06	.71
しみじみとした	-.10	-.09	.71
恋しい	.26	-.05	.68
むなしい	-.22	.32	.55
さみしい	.11	.39	.50
＜残余項目＞			
あの頃に戻りたい	.44	.16	.31
心がひかれる	.42	-.10	.38
なじみがある	.41	-.07	-.06
面白い	.40	.39	.09
悲しい	-.07	.51	.49
ドキドキする	.17	.39	.38
おかしい	.08	.35	-.18
照れくさい	.11	.31	.13
古くさい	.02	.21	.02
因子間相関	I	-.18*	.30**
	II		.40**
	III		

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

探索的因子分析の結果をもとに、『親しみ』『ほろ苦さ』『せつなさ』の3因子から成るモデルを構築し、確証的因子分析によって、モデルの妥当性を検討した。モデルの構築にあたっては、探索的因子分析の結果のとおり、『親しみ』『ほろ苦さ』『せつなさ』の3因子を潜在変数として設定し、それぞれの因子に探索的因子分析における因子負荷量が.700以上のものが含まれることを想定した。潜在変数間の誤差相関は設定していない。分析の結果、すべてのパスにおいて有意な値が認められ、モデル全体にお

いて一定の適合度が認められた (GFI = .909, AGFI = .861, CFI = .955, RMSEA = .069)。確認的因子分析の結果をFigure 1 に示した。なお, 各項目の信頼性係数を算出したところ, 『親しみ』 ( $\alpha = .88$ ), 『ほろ苦さ』 ( $\alpha = .89$ ), 『せつなさ』 ( $\alpha = .65$ ) であり, 概ね信頼性が支持された。

さらに, 項目分析を行うため, 各項目における因子得点との相関 (I-T相関) を求めた。その結果, すべての項目と因子得点の間に有意な相関が認められた。

また, G-P分析を行うため, 各因子得点の平均点, 親しみ (Mean = 4.67), ほろ苦さ (Mean = 2.62), せつなさ (Mean = 4.17) を基準に, 調査対象者を平均値よりも高い群をgood群, 低い群をpoor群と2群に分類した。群間における各項目の得点を検定によって比較した。分析の結果, すべての項目において有意な差が認められた。KNSにおけるI-T相関およびG-P分析の結果をTable 3 に示した。

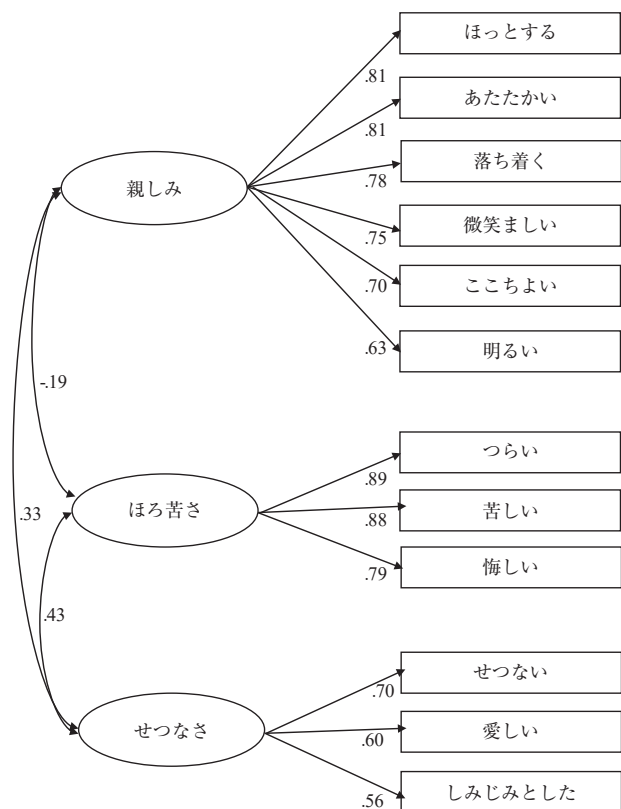


Figure 1 確認的因子分析による各項目の標準化係数

Table 3. KNSにおけるI-T相関およびG-P分析の結果

	I-T	good	poor	<i>t</i>
I. 親しみ				
ほっとする	.846 ***	5.51	3.66	11.02 ***
あたたかい	.821 ***	5.49	4.14	9.39 ***
落ち着く	.828 ***	5.07	3.55	8.31 ***
微笑ましい	.775 ***	5.55	4.24	9.45 ***
こちよい	.766 ***	5.29	4.00	8.04 ***
明るい	.728 ***	4.95	3.60	7.96 ***
II. ほろ苦さ				
つらい	.915 ***	3.83	1.79	11.64 ***
苦しい	.906 ***	3.45	1.56	12.01 ***
悔しい	.890 ***	3.88	1.69	10.85 ***
III. せつなさ				
せつない	.792 ***	4.63	3.00	8.20 ***
愛しい	.775 ***	5.06	3.35	9.70 ***
しみじみとした	.741 ***	5.20	3.83	8.57 ***

\*\*\* $p < .001$

### 考察

本研究では, 懐かしさが複合的な感情から成り立っていることを踏まえ, 金城式懐かしさ感情尺度 (KNS) を構成し, 因子構造を確認すると共に, 信頼性の検討をすることを目的とした。

探索的因子分析において, 『親しみ』『ほろ苦さ』『せつなさ』の3因子が得られた。これは, 今野・上杉 (2003) の懐かしさは正負の情動感情が融合したものであるという考えを支持している。続く確認的因子分析では, 1つの因子のみからの負荷を受けるという厳しい制約を設けるため, モデルの適合度を保つために弁別性の高い項目のみを採用した。探索的因子分析と同様に3因子構造が認められた。よって, 懐かしさ感情に関連する尺度の先行研究と同様に, 本研究においても懐かしさを構成する要素は複数あることが支持された。長峯・外山 (2016) がノスタルジア経験とは“bittersweet”な感情 (アンビバレント感情) と示しているように, 懐かしさはポジティブ感情とネガティブ感情が同時に体験されるアンビバレント感情だと考えられる。

項目分析の結果から, I-T相関においては全項目において因子得点との間に有意な相関が認められた。G-P分析においても, すべての項目においてgood群の得点がpoor群よりも有意に高かった。これらの結果を総合し, 項目レベルにおいても, 因子構造の妥当性が確認された。

因子分析の結果から懐かしさは複数の要素から成り立っていると考えられたが、懐かしさの自由記述の内容もいくつか種類がみられた。ポジティブな出来事やネガティブな出来事、さらにそれらが混在するような出来事が得られた。つまり、記憶の想起も複雑であり、さまざまな質の懐かしさが体験されたと考えられる。

次に、それぞれの因子について考察する。『親しみ』は先行研究においても重要な因子となっており、寫田 (1997) は最も懐かしさを規定する感情要素は快感情を含んだ『親しみ』であると示唆している。本研究においても『親しみ』因子が抽出され、懐かしさの要素として欠かせない感情だと考えられる。今野・上杉 (2003) は、ポジティブな感情体験によってそれと一致した方向への再処理が可能になると推察している。加えて、懐かしい思い出はそうでない思い出と比較し、ポジティブな感情的印象を持ち、ポジティブな気分状態で想起されると示されている (多田, 1998)。本研究では、自由記述で懐かしい出来事を想起させたため、調査対象者の中で昇華され、基本的には受け入れられるポジティブな経験が想起されたと示唆される。よって、ポジティブな出来事の想起からは、ポジティブな気分が誘導され、『親しみ』を抱くことができたと推察される。

『ほろ苦さ』は本研究における予備調査で得られた項目で構成されており、先行研究では考察されていない要素である。Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge (2006) は、ネガティブな気分を感じている際に、強くノスタルジアを感じることを示している。また、ノスタルジア経験は、少し悲しい気分の時に、自分を主人公として他者との関わりのある重要な出来事を想起するという状態であるということが示されている (楠見, 2014)。つまり、『ほろ苦さ』因子の持つ「つらい」「苦しい」といった感情が具体的な自伝的記憶の想起と関連していることが考えられる。自由記述による個人の懐かしさの想起によって、記憶が意識化され、より記憶が鮮明になる中で過去を追体験したため、『ほろ苦さ』が促されたと考えられる。ネガティブな出来事の想起や、重要な出来事の想起によって、『ほろ苦さ』を感じたと推察される。加えて、長峯 (2017) はノスタルジアを「感

傷を伴う懐かしさ」と示しているが、『ほろ苦さ』因子には「悔しい」という因子が含まれており、単にネガティブな感情というよりも感傷に浸るような状態を示していると推察される。

Holak & Havlena (1998) や瀧川・仲 (2008) は、『せつなさ』は個人にとっての大切な思い出の存在を反映している感情であり、現在では失われた「過去」への喪失感と、そのような過去を体験したという充実感を反映していると示している。『せつなさ』因子では、「愛しい」や「恋しい」という具体的ではないほんやりとした対象に抱く感情に類似すると考えられる。『せつなさ』因子に含まれる「せつない」「さみしい」は、「ほろ苦さ」を指すものだと示されているが (Davis, 1990)、本研究では、『ほろ苦さ』因子と『せつなさ』因子の2種類の因子として抽出された。前述したように、『ほろ苦さ』は具体的な自伝的記憶との関連が示唆され、特定の具体的な過去の経験を追体験する中で生じたと推察される。一方で『せつなさ』は、様々な過去の記憶を想起することで、過去の包括的なイメージを抱いたことから生じた懐かしさであったと推察される。

つまり、『ほろ苦さ』因子は具体的な自伝的記憶からもたらされる懐かしさであり、『せつなさ』因子は曖昧なほんやりとした過去へのイメージからもたらされる懐かしさであると推察される。よって、『ほろ苦さ』と『せつなさ』は、区別する必要がある、懐かしさを構成する重要な要素だと考えられる。

本研究では、寫田 (1997) や石井 (2014) が示している『おかしさ』因子は認められなかった。『おかしさ』は時間的な空白を反映している感情とされているが (寫田, 1997)、ノスタルジアの時間的側面についてはほとんど明らかにされていないと示されており、記憶の想起と懐かしさの感じ方には様々な過程があると示唆されている (楠見, 2014)。『おかしさ』には、「古くさい」「照れ臭い」という項目が含まれており (石井, 2014)、記憶からある程度の時間的距離を保てることで面白おかしさを感じることができると考えられる。本研究では自由記述により懐かしさを想起させたため、調査対象者による経験からの空白時間が異なっており、『おかしさ』を感じにくかったと推察される。

本研究では、懐かしさとは複数の感情が同時に体験される感情であることが示され、先行研究を支持する結果となった。加えて、懐かしい出来事を記述させた場合、想起される懐かしい記憶もさまざまであると推察された。懐かしさを単一的な捉え方ではなく、複合的な感情であると捉え、体験される懐かしさの質について検討していくことが必要である。さらに、調査対象者の気分によって質の異なる懐かしさ体験が得られると示唆される。今後、調査対象者の気分が想起される懐かしい記憶やそれに伴う懐かしさ体験に与える影響についても検討することが求められるだろう。

本尺度の今後の活用としては、基礎的研究で懐かしさの程度について客観的に検討するために用いることが可能である。加えて、懐かしさの質を比較検討することができると考えられる。懐かしさのどのような要素がどのような影響を示すかなどを検討することができ、懐かしさの活用方法について研究を行っていくことができる。

本研究の課題として、調査対象者が女子大学生に限定されていることが挙げられる。懐かしさは自伝的記憶を反映しているとされているが（畠田, 1997）、青年期の心理社会的発達課題の一つにアイデンティティの確立があり、内省を通して自己形成をしていくとされている（三浦・橋本・林, 2010）。一方で、老年期は青年期に比べて人生におけるポジティブな出来事もネガティブな出来事も、共に懐かしく受け止める傾向があると示されており（今野・吉川, 2011）、懐かしさを感じる刺激や生い立ちや自分の体験に関する回想によって気分の改善という精神的な健康の向上を促すとされている（柴田・岩永, 2009）。つまり、年代によって懐かしさの感じ方は異なると推察される。今後、懐かしさについて生涯発達の視点を考慮し、様々な年代において検討していくことが重要であるだろう。

また、懐かしさ感情に関連する尺度には標準化された尺度がなく、基準関連妥当性の検討が困難であった。加えて、池田・針塚（2015）が示しているような身体感覚については検討できていない。懐かしさ体験は、情動の側面だけではなく身体の側面も密接に関わっていることが指摘されている（池田・

針塚, 2015）。金城式懐かしさ感情尺度（KNS）で示されたような懐かしさの要素によってリラックス感や高揚感といった身体感覚が変化する可能性も示唆される。情動と身体など複数の側面と懐かしさの関連については、今後検討すべき課題だと考えられる。

さらに、本尺度を活用し、懐かしさがどのように気分に影響を与えるかなど、懐かしさと関連し変化する要素と掛け合わせながら、研究を積み重ねていくことが重要である。

## 引用文献

- Barrett, F.S., Grimm, K. J., Robins, R. W., Wildschut, T., Sedikides, C., & Janata, . (2010). Music-evoked nostalgia: Affect, memory, and personality. *Emotion, 10*, 390-403.
- Davis, F (1990). 『ノスタルジアの社会学』 間場寿一・萩野美穂・細辻恵子（訳）世界思想社
- 林美都子・斎藤英基（2013）. 音楽のもたらす懐かしさが安らぎと認知的作業に与える影響 北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編, 64, 39-48.
- Holak, S. L., & Havlena, W. J. (1998). Feelings, fantasies, and memories: An examination of the emotional components of nostalgia. *Journal of Business Research, 42*, 217-226.
- 池田恭子・針塚進（2015）. 表現様式の違いが懐かしさ体験に伴う情動と身体感覚に与える影響についての検討 九州大学心理学研究 九州大学大学院人間環境学研究院紀要, 16, 17-24.
- 石井あゆ美（2014）. 音楽に対する懐かしさ感情の多面的側面がポジティブ感情喚起に及ぼす効果 生老病死の行動科学, 17-18, 15-23.
- 磯崎英里香・杉山崇・佐藤梨花（2011）. ノスタルジア（懐かしさ）の側面の再検証—青年期のノスタルジアにおける感情体験の探索的検討— 心理相談研究 神奈川大学心理相談センター紀要 2, 107-117.
- 小林麻美・岩永誠・生和秀敏（2002）. 音楽の「懐かしさ」と感情反応・自伝的記憶の想起との関連 広島大学総合科学部紀要 理系編, 28, 21-28.
- 小池眞規子・渋谷昌三・藤巻貴之（2007）. リラック

- ス感尺度作成の試み—大学生を対象として—目白  
大学心理学研究, 3, 1-11.
- 今野義孝・上杉喬 (2003). 懐かしさの感情体験に及  
ぼす動作法による快適な心身の体験の効果—脳波  
の快適度と感情イメージ尺度による検討— 人間  
科学研究, 25, 63-72.
- 今野義孝・吉川延代 (2011). 高齢者の回想に及ぼす  
動作法の効果—過去の「想起様式」と懐かしさの  
「体験型」との関係— 人間科学研究 文教大学人  
間科学部, 33, 185-196.
- 楠見孝 (2014). なつかしきの心理学—思い出と感情  
誠信書房.
- 松山真弓 (2003). 感情体験の身体的側面からの基礎  
研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 87-  
98.
- 三浦巧也・橋本創一・林安紀子 (2010). 青年期にお  
ける自己の気づきに関する調査研究—大学生の過  
去の振り返りを通して— 東京学芸大学紀要 総  
合教育科学系, 61, 167-173.
- 長峯聖人 (2017). 日本におけるノスタルジアの定義  
に関する一検討—アンビバレントな感情に着目し  
て— 感情心理学研究, 24.
- 長峯聖人・外山美樹 (2016). 日本人はノスタルジア  
を経験しうるか?—ノスタルジアの“bittersweet”  
な側面に着目して— 感情心理学研究, 24, 22-32.
- 新村出 (編) (2018). 広辞苑 第七版 岩波書店
- Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge,  
C. (2008). Nostalgia: Past, present, and future.  
*Current Directions in Psychological Science*, 17,  
304-307.
- 柴田(小林)麻美・岩永誠 (2009). 高齢者が懐かしさ  
を感じる音楽が引き出す回想内容と気分との関係  
日本音楽療法学会誌, 9, 136-143.
- 寫田久美 (1997). 音楽に対するなつかしきの構成感  
情について 日本教育心理学総会発表論文集, 39,  
374.
- Stern, B. B. (1992). Historical and personal nostal-  
gia in advertising text: The fin de siècle effect.  
*Journal of Advertising*, 21, 11-22.
- 多田美香里 (1998). 「懐かしい」思い出に関する偶  
発的想起経験の事例研究 感情心理学研究, 6, 43-  
44.
- 瀧川真也・仲真紀子 (2008). 懐かしさ尺度作成の試  
み 日本心理学会大会発表論文集, 726.
- 瀧川真也・仲真紀子 (2011). 懐かしさ感情が自伝的  
記憶の想起に及ぼす影響—反応時間を指標として  
— 認知心理学研究, 9, 65-73.
- Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge,  
C. (2006). Nostalgia: Content, Triggers, Func-  
tions. *Journal Of Personality And Social Psychol-  
ogy*, 91, 975-993.